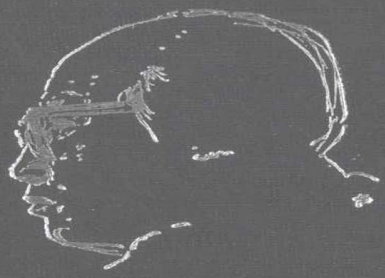
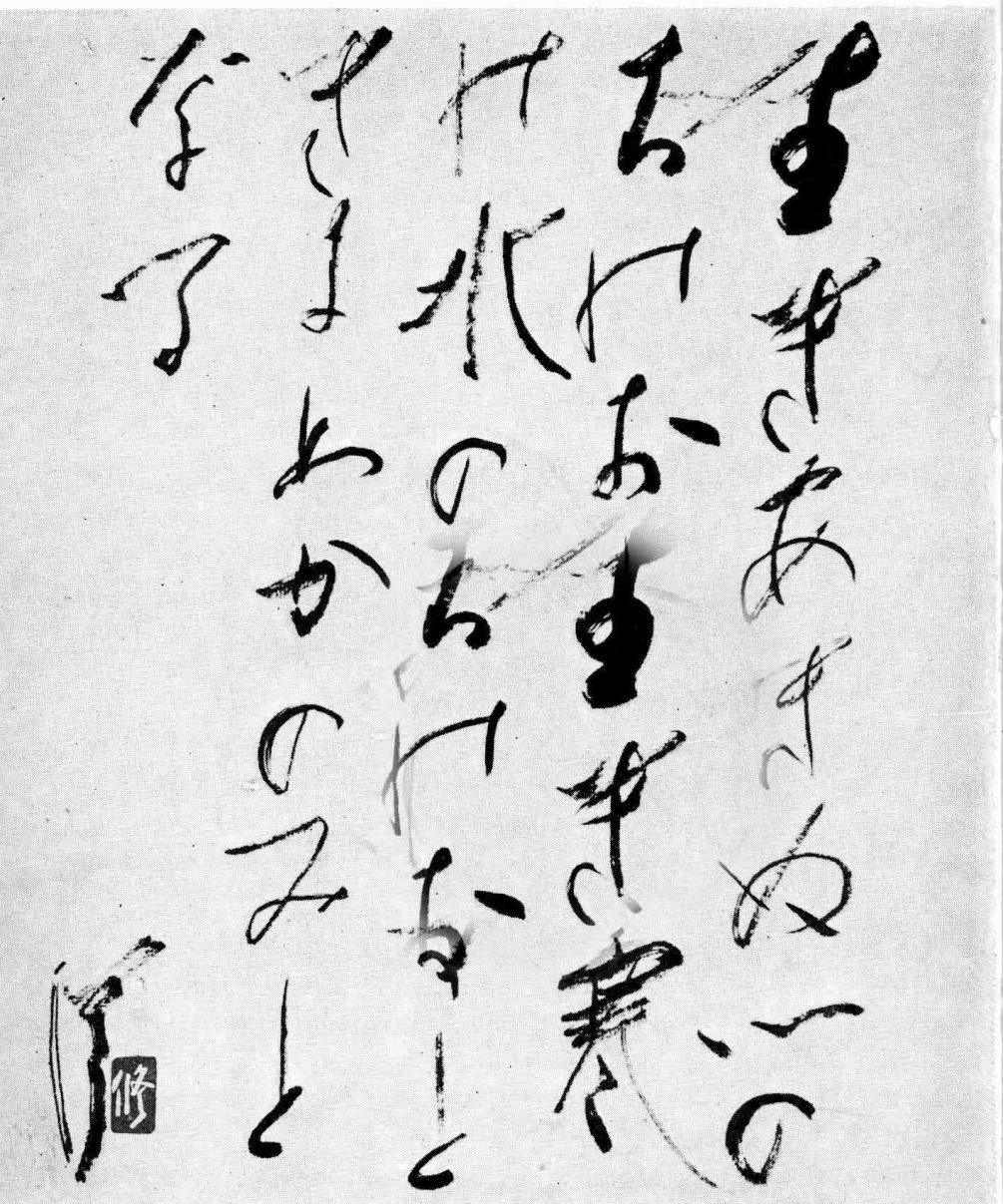
評論 木俣修作品史



# 評論　木俣修作品史

吉野昌夫著



## 吉野昌夫（よしのまさお）

大正11年（1922）東京に生れる。昭和22年東大農学部農業経済学科卒業。農林省を経て現在農林漁業金融公庫に勤務。旧制高等学校のころから作歌をはじめ，昭和17年『多磨』に入会。翌18年大学に在籍のまま応召，このころから木俣修氏の指導を受ける。昭和22年『八雲』の新人に推される。昭和28年『形成』創刊に参加，現在に至る。歌集『遠き人近き人』（新典書房，昭31．8．10）のほか，『昭和短歌史』（春秋社，昭33．7．20），『現代日本文学大事典』（明治書院，昭40.11.30）等に執筆を分担。現代歌人協会々員。


評論　木俣修作品史

昭和48年8月15日発行

著者　吉野昌夫
発行者　石黒清介
印刷所　日本新聞印刷
発行所　短歌新聞社

〒166 東京都杉並区高円寺南4—43—9
振替東京 21683番
電話 03（312）9185番

製本　菊川製本　　定価 2000 円


此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

評論　木俣修作品史　目次

はじめに……五

I

『市路の果』……一三
『みちのく』……二六
『高志』……四〇
『凍天遠慕』……七六
『流砂』……八七
『冬暦』……一〇九
『落葉の章』……一二八
『歯車』……一五二
『天に群星』……一七〇

II

木俣修作品史余話――ふたたび筆をとるの記……一九一

『呼べば谺』……一九八
『去年今年』……二三六

Ⅲ

木俣修作品について……二九五
『冬暦』の世界……三〇一
『落葉の章』の背景……三〇六
『去年今年』の一首……三三四
木俣修論……三三六
木俣修人と作品……三三二
『形成』と木俣修……三四八
木俣修氏の横顔……三五四
短歌との出会い——先生と私……三五八

☆

木俣修略年譜……四一三
おわりに……四二三

# はじめに

この「木俣修作品史」を書きはじめてからもう十五年近い歳月を経過してしまった。先生の未刊の第一歌集『市路の果』が雑誌『短歌研究』の綴込歌集として発表されたのが昭和三十四年の初夏で、私はその秋からものにつかれたようにこの作品史にとりかかった。何か巡礼にでも出るような気持であった。そして当時の最新歌集『天に群星』にゆきついて一応のしめくくりをしたのは翌三十五年の夏である。そのころの回想は、この書物に収めた「木俣修作品史余話——ふたたび筆をとるの記」に記した通りであるが、波瀾の多い昭和の歴史を生き証人のように歌い続けた先生の姿にこころ洗われる思いをし、私自身生きる力を与えられたような気がした。

その後『呼べば谺』『去年今年』が上刊され、そのつど新しい気持で書きついできた。

このたび一本にまとめるに当って、全体に手を加え、現在の私の目で統一をはかろうと思ったこともあったが、長年にわたって書きついだものであり、非常に困難を伴うとともに、先生も

「君がそのようなことをはじめたら、また何年先になるかわかったものではない」といわれるので、一年を通じて一気に書き上げた『天に群星』までをⅠ、その後書きついだ部分をⅡとし、多少の字句の訂正と部分的な加除を行なうにとどめ、ほとんど発表時のものにしたがうことにした。ある意味では先生の作品史であると同時に私の精神史のような気がしないでもない。

なお、この十余年の間、しらずしらずのうちに先生についてかなりのものを書いていた。幼い文章もあり、重複する部分もあるが、これも木俣修研究資料として作品史と表裏をなすものであるので、あわせて収録することにした。

私が先生の門をたたいたのは、先生が旧制富山高等学校の教職をなげうって富山から上京された昭和十八年の秋で、私はいわゆる学徒出陣で召集されるのを待つ学生であった。とうてい生きて還れるものとは思えなかったので、その前に然るべき方に歌を見ていただいた上で戦場におもむきたいという気持からであった。先生を選んだのは、『多磨』誌上ならびにその年上刊された『高志』の作品に私淑していたことはもちろんであるが、私の高等学校時代のクラス担任であった橋本佳先生（『校本夜半の寝覚』の著者）から木俣先生のお話をうかがっていたこと、折よく先生がその年の五月上京されて、お訪ねすることができる状況になったこと等の機縁による。先生は学業半ば戦場にゆく私の気持を理解され、こころよくむかえ容れて下さった。それから三十

年、一時なまけたこともあったが、何とか先生のあとについて短歌の道につながってきた。

私は父を昭和十六年に失っていたから、弟子であると同時に、心のどこかに父親に接するような気持をいだいていた。ふつうの親子が、そうであるように、父親のことは肌で感じとっていても、細かいことがらなどについては、かえって聞きただしにくいこともあるもので、資料のない部分は感で推量する域を出ていないところも多い。ただ、若いころ書きはじめたことでもあるし、弟子は弟子なりに（息子は息子なりに）言いたいこともあるもので、面と向っては言いにくいことをけっこう書いているが、先生は別にとがめられることもなくそのまま掲載して下さった。

とにかく肌で感じとった「弟子の書」であることに間違いない。

最後に、こうした先生と私との関係にふれたものとして「短歌との出会い」という文章を加えた。個人的な部分にわたるところが多く、いささか面はゆい文章であるが、先生ならびに大西民子氏らのすすめもあり、「弟子の書」である本書の巻末にあえて付け加えることにした。

先生は歌人であると同時に人も知る国文学者であり、その活動分野は多岐にわたっている。短歌の弟子にすぎない私の能力の限界から、その全貌にとりくむことができないのは残念であるが、それはまたその分野に人を得て明らかにされることを期待せざるを得ない。

先生の作品活動はますますさかんであり、これからも何巻もの歌集が上刊されてゆくであろ



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

う。私は私の義務としてそのつど書き足してゆきたいと思っている。

本書の刊行が、今後木俣修研究に志す人々の一助ともなれば幸いこれにつきるものはない。

昭和四十八年三月記

吉野昌夫

# 評論　木俣修作品史

# I

評論　木俣修作品史

# 市路の果

長い間未刊となつていた初期の作品集『市路の果』が発表されたことにより、三十年余にわたる木俣修の作歌活動のほぼ全容に接することが可能となつた。一口に三十年といつても、この間には時代の大きな変遷があり、歌風においても幾曲折がみられるのであるが、九巻数千首（昭和三十四年現在）にのぼる歌集とその作品群は、波乱の多かつた昭和の時代を生きぬいてきた作家の人間像を何にもまして正確に示してくれている。作品とその背後にあるもの――それは短歌が短詩型である関係上、一首一首の作品だけからはくみとれない部分を多く含んでいるが、年代を背負つた作品群からそうした人間像が自然ににじみ出てくるものである。短歌の魅力は、一定期間（それも長期にわたるにこしたことはない）の作品群がほうふつさせる人間像と、そこに生み出された作品との関係――順応、反映と、ある場合には葛藤、反逆――の中に見出されるのではないかと私は考えている。時代的文学的背景との関係がさらにプラスされることはいうまでもな

い。以下、制作年代にしたがつて歌集を追い、木俣修における作品とその背後にあるものを読者とともにさぐつてみることにしたい。

昭和三十四年六月号の『短歌研究』に綴込歌集として発表された。昭和三年四月から六年三月に至る三カ年（二十二歳〜二十五歳）の作品百五十二首から成つている。

〈私の短歌を作りはじめたのは大正のおわりであるが、結社に加わつて、その機関雑誌に発表するようになつたのは、昭和三年のことである。〉とあとがきにあるが、この「大正のおわり」というのは、角川文庫『木俣修歌集』の巻末の「年譜」によつて、大正十三年のころのことであることがわかる。当時修は十八才であつた。〈『日光』創刊に際し誌友となつた。この前後短歌を作り、白秋の選をうけようと決意したが、遂に投稿しないままに過ぎた〉というのがそれである。（『日光』というのは白秋が中心になつて作つた超結社的な雑誌で、石原純・前田夕暮・木下利玄・小泉千樫・釈迢空等が集つていた。文学史的に重要な意味をもつ雑誌である。）また、大正十五年の部分には〈東京高等師範学校文科第二部（国語漢文）に入学。四月入学と同時に短期現役兵に服役のため休学して、京都伏見深草聯隊に入隊した。在隊中大いに歌を作り、歌集類を読んだ。〉とある。当時何かとうるさかつた軍隊内に歌集類を持ち込み、作歌することの苦心



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com